琉球大学学術リポジトリ

日本語学習者の「は」と「が」の使い分けに関する一考察：中国語母語話者と韓国語母語話者の場合

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学留学生センター
	公開日: 2008-07-03
	キーワード (Ja): 助詞, 「は」と「が」, 誤用, 中国語母語話者, 韓国語母語話者
	キーワード (En): particles, wa and ga, error analysis, Korean native speakers, Chinese native speakers
	作成者: 謝, 福台, 金城, 尚美, Xie, Futai, Kinjo, Naomi
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/6576

研究論文

琉球大学留学生センター紀要
留学生教育 第2号，2005

日本語学習者の「は」と「が」の使い分けに関する一考察
－中国語母語話者と韓国語母語話者の場合－

謝　福台・金城尚美

要　旨

本稿は，日本語学習者にとって習得が困難だとされる助詞の中でも特に「は」と「が」の使い分けに関する論考である。とりわけ，助詞があるという点で，日本語と統語論上，似た体系を持つとされる韓国語の母語話者と，日本語の文法体系とは異なり，格助詞や係助詞がない中国語の母語話者に調査を行い，「は」と「が」の誤用の分析を行った。

その結果，「は」と「が」の使い分けについて中国語母語話者と韓国語母語話者を比較すると，韓国語母語話者は誤用率がかなり低いことが明らかになった。これは母語からの正の転移がかなり寄与していると推察される。しかし「は」や「が」が出現する条件によっては，誤用率が高くなることから，「は」と「が」の出現条件に関する知識が不足している部分もあることがわかった。一方，中国語話者にとって「は」と「が」の使い分けは誤用率がかなり高いことが示された。この結果から，中国語話者にとって「は」と「が」の使い分けは予想以上に複雑な言語処理を要求することが推察された。本研究によって，「は」と「が」使い分けに関する条件や規則など，指導に生かすべき点がいくつか明らかになった。

キーワード：助詞，「は」と「が」，誤用，中国語母語話者，韓国語母語話者

1．はじめに

助詞の習得は，日本語と同じ膠着語で，助詞体系（格助詞，係助詞，終助詞など）が近い韓国語の母語話者は，日本語の助詞の使用において他の母語話者と比較し，正確であると評価されている。一方，日本語のような助詞体系を持たない孤立語である中国語母語話者にとって，助詞は日本語を習得する際に障壁の１つになっていると考えられる。日本語の特に助詞の習得において，日本語に近い言語体系を持つ韓国語の母語話者と，日本語とは異なる言語体系を持つ中国語の母語話者の「は」と「が」の

誤用率を調べることにより，誤用の要因や助詞の習得上の困難点を見出し，教育に還元するための知見を得ることが本研究の目的である。

2．先行研究

日本語学習者の「は」と「が」の習得や誤用に関しては，学習者の作文，発話，学習者に対するクローズテストなどのデータによる研究が90年代から盛んに行われてきた。坂本（1997）は，1996年までの研究結果を概観し，「は」と「が」について以下の２つのことが言えると述べている。

①すべて「は」の方が「が」より正用率，正答率が高い。

②機能別の正用順序は研究によって多少異なるが，初級から上級までの学習者を概観すると，次の図のように大きく３つの階層に分けられる。

易 ◀……▶ 難		
状態述語の目的語の「が」 主題の「は」	中立叙述の「が」	総記の「が」 対照の「は」 従属節内の「が」

図１　「は」と「が」の習得難易度（坂本 1997：183）

一方，田村（1993）は上級学習者19名（国籍や母語は明記されていない）を対象に，四分類した「は」と「が」の機能を穴埋め文を使った調査で正用率の高い順に，１）疑問詞疑問文：80.7%，２）主語の選択／述部の選択：70.2%，３）既知／未知：69.2%，４）行為／出来事の単発性／習慣性：60.5%，という結果を得ている。また西隈（1998）は，初級の韓国人学習者を対象に行った調査により，①総記の「が」でも，疑問詞の後ろに付く「が」より，旧情報＋旧情報の場合の「が」は習得しにくく，②主題の「は」でも，文脈指示の名詞句の「は」より主題提示の「は」は多少困難である可能性がある，という結果を導いている。

八木（1998）は，「は」と「が」の正用順序に関する12の研究結果を概観し，「は」と「が」に関しては，「は」の方が「が」よりも習得が早いという研究結果が多いことを示している。

助詞の中でも「は」と「が」の意味と用法は細かく多様で，その習得順序や正用順序については，まだ完全に解明されているとは言えない。そこで本研究では，特に中国語母語話者と韓国語母語話者の「は」と「が」の使い分けについて比較しながらそ

れぞれの母語話者の特徴を明らかにし，学習上または指導上，留意すべき点を検討する。

３．調査概要

「は」と「が」の誤用の傾向を調べるために，助詞に関する調査を実施した。

3.1　調査票

調査票は，①問題の問いの部分（文章中の空欄に助詞「は」と「が」を埋める問題），②被調査者の背景情報を問う部分（国籍，年齢，日本語学習歴），③助詞の使用に対する意識を問う部分（日本語を使う際に助詞を意識しているか，日本語の助詞が難しいと思うか，日本語の助詞の中で一番難しいと思う助詞など）大きく３つの部分から成っている。

3.2　調査対象と実施場所・実施者

調査は，琉球大学と沖縄国際大学で行った。調査対象者は中・上級の日本語の授業を受講している中国語母語話者（中国，マカオ，台湾を含む。以下Ｃとする。）と韓国語母語話者（以下Ｋとする。）である。Ｃ34名，Ｋ20名の計54名の留学生のデータが得られた。調査は筆者(金城)が担当している日本語のクラスと他の日本語教師に依頼し，授業の時間を使用して実施した。調査は，2003年12月と2004年８月の２回行った。

3.3　調査に使用した助詞の問題文

先行研究の多くは「は」の用法を２分類，「が」の用法を３分類にし調査を行っているが，本研究では誤用が発生しやすいと推測される「は」と「が」を取り上げ調査を行い考察を加えた。それは中・上級の学習者の「は」と「が」の使い分けの問題は，いくつかの用法に限られたものではないためである。実際の「は」と「が」の用法は，文脈や文の構造・成分によって異なり，用法という枠組みで捉えることは適切でないと考えた。

調査に使用した助詞の穴埋め問題は，野田尚史（1985）『セルフマスターシリーズ１　はとが』から借用したもので，計47題，穴埋め個数は76項目であった。調査に使用した問題文は文献や先行研究を基に，日本語学習者が間違いやすいと考えられる問題を選択した。

4．調査結果

被調査者のＣとＫの平均年齢，平均学習歴は近く，みな中・上級のレベルの日本語クラスに配置された学習者であることから，調査結果の分析にあたっては，２つのグループが等質であるとみなすことができる。

表１　被調査者の年齢と学習歴

	平均年齢（歳）	平均学習歴（月）
C	23.3	31.1
K	24.1	33.0

4.1　助詞穴埋め問題の結果[1]

問題文の助詞の正答を確認するために，調査票の助詞の穴埋め問題を琉球大学の文系教官（日本語母語話者）10名にも解答してもらった。その結果，引用文献の解答と著しく異なる結果が出た（28）[2] の問題文は，分析対象から外すことにした。

助詞の穴埋め問題の解答を調べた結果，Ｋの平均誤用率はＣよりも低く，３分の１にも満たないことが分かった。

表２　ＣとＫの助詞の誤用率（全体）

	平均誤用数	平均誤用率（誤用総数／Q）
C	26.4	35.3%
K	8.4	11.1%

Q（穴埋め項目数）＝75

4.2　誤用率の高い項目の順位

ＣとＫの各問題文の項目の誤用率は，表３に示したとおりである。上位10位の中で，ＣとＫの両方とも誤用率の高い項目は，８と30と34の３項目だけである[3]。またＣとＫの誤用率の高い上位20位を見ると，1-2，6，11-1，25-4，35，36，39-1，39-2，40，42，46など11項目が誤用率の高い問題文で，助詞の14項目が両方の上位20位に入ることがわかった。しかしＣとＫの誤用率の差はかなり大きく，例えばＫの誤用率30％に相当する９位はＣの43位になる。またＫの誤用率は，32位以下で５％以下になる。このように，ＣとＫの誤用率にはかなりの開きがあり，誤用率の高い順に単純に比較することができない。したがって，本稿ではＣの誤用率高い助詞を中心にみていくことにする。

表３　ＣとＫの「は」と「が」の誤用率順位

C				K				C				K			
順位	誤用率[4]	正答	項目	順位	誤用率	正答	項目	順位	誤用率	正答	項目	順位	誤用率	正答	項目
1	91.2%	が	18-2	1	65.0%	が	39-2	38	35.3%	は	18-4	32	5.0%	が	19-2
2	76.5%	が	11-1	2	55.0%	は	25-4	40	32.4%	は	33	32	5.0%	は	21
3	73.5%	が	39-1	2	55.0%	は	30	40	32.4%	が	43	32	5.0%	が	23-1
4	70.6%	が	2-1	4	45.0%	が	35	40	32.4%	が	44-2	32	5.0%	が	23-2
4	70.6%	が	2-3	5	40.0%	が	8	43	29.4%	が	47-4	32	5.0%	が	23-3
4	70.6%	が	34	5	40.0%	が	34	44	26.5%	が	20-2	32	5.0%	が	25-2
4	70.6%	が	40	7	35.0%	は	1-2	44	26.5%	は	29	32	5.0%	が	27
8	67.7%	が	8	7	35.0%	が	15	44	26.5%	が	32-2	32	5.0%	は	29
8	67.7%	は	30	9	30.0%	が	6	44	26.5%	が	47-5	32	5.0%	が	32-2
10	64.7%	は	19-1	9	30.0%	が	11-1	48	23.5%	は	1-1	48	0.0%	は	2-2
10	64.7%	が	36	9	30.0%	が	42	48	23.5%	が	5	48	0.0%	が	5
10	64.7%	が	37-1	12	25.0%	が	37-2	48	23.5%	が	17-2	48	0.0%	が	7-1
13	61.8%	は	1-2	12	25.0%	は	38	48	23.5%	が	41	48	0.0%	は	7-2
13	61.8%	が	6	12	25.0%	が	40	52	20.6%	は	13	48	0.0%	が	14-1
13	61.8%	が	19-2	12	25.0%	が	41	52	20.6%	は	17-1	48	0.0%	は	14-2
13	61.8%	が	39-2	16	15.0%	は	1-1	52	20.6%	は	21	48	0.0%	は	17-1
17	58.8%	は	22	16	15.0%	が	4	55	17.7%	は	18-3	48	0.0%	が	18-1
17	58.8%	は	25-4	16	15.0%	は	31	55	17.7%	は	24-1	48	0.0%	は	18-3
17	58.8%	が	42	16	15.0%	が	36	55	17.7%	が	24-2	48	0.0%	は	20-1
20	55.9%	が	35	16	15.0%	が	39-1	58	14.7%	が	16	48	0.0%	が	20-2
20	55.9%	が	46	16	15.0%	は	45	58	14.7%	が	23-1	48	0.0%	は	22
22	52.9%	が	32-1	16	15.0%	が	46	58	14.7%	は	24-3	48	0.0%	は	24-1
22	52.9%	が	37-2	23	10.0%	が	2-3	58	14.7%	が	24-4	48	0.0%	が	24-2
24	47.1%	が	9-2	23	10.0%	は	3	58	14.7%	は	44-1	48	0.0%	は	24-3
24	47.1%	が	15	23	10.0%	が	9-2	63	11.8%	は	26	48	0.0%	が	24-4
24	47.1%	は	25-3	23	10.0%	が	12	64	8.8%	が	7-1	48	0.0%	は	25-1
27	44.1%	は	3	23	10.0%	は	13	64	8.8%	は	7-2	48	0.0%	は	26
27	44.1%	が	4	23	10.0%	が	16	66	5.9%	が	14-1	48	0.0%	が	32-1
27	44.1%	は	45	23	10.0%	が	18-2	66	5.9%	は	14-2	48	0.0%	は	33
30	41.2%	は	20-1	23	10.0%	は	25-3	66	5.9%	が	23-2	48	0.0%	が	43
30	41.2%	は	31	23	10.0%	が	37-1	66	5.9%	が	25-2	48	0.0%	は	44-1
30	41.2%	は	38	32	5.0%	が	2-1	70	2.9%	が	18-1	48	0.0%	が	44-2
33	38.2%	は	2-2	32	5.0%	が	9-1	70	2.9%	が	23-3	48	0.0%	が	47-1
33	38.2%	が	9-1	32	5.0%	は	10	70	2.9%	は	25-1	48	0.0%	は	47-2
33	38.2%	は	10	32	5.0%	が	11-2	73	0.0%	が	47-1	48	0.0%	が	47-3
33	38.2%	が	12	32	5.0%	が	17-2	73	0.0%	は	47-2	48	0.0%	が	47-4
33	38.2%	が	27	32	5.0%	は	18-4	73	0.0%	が	47-3	48	0.0%	が	47-5
38	35.3%	が	11-2	32	5.0%	は	19-1								

4.3 誤用率の高い項目に関する考察

ここではまず，ＣとＫで誤用率の高い上位10位に入っている項目について検討する。

4.3.1 思いがけない出来事・驚いた出来事を示す場合

(8)，(9)，(11)は，思いがけない出来事や驚いた出来事が起こったことを述べる文である。野田（1985）によるとこのような場合，助詞として主語に「が」が付き，(8)，(9)，(11)は同じ性質を持つ用例として提示されている。11-1の誤用率は，Ｃが76.5％なのに対し，Ｋは30.0％，また８の誤用率はＣが67.7％，Ｋでは40.0％と高率である。さらに，Ｃで9-1が38.2％，9-2が47.1％なのに対し，Ｋでは9-1が5.0％，9-2が10.0％にとどまっている。8，9，11-1で，助詞「が」を使用すべき環境は同じだとみなされている（野田 1985）が，誤用率に開きがある。特に８と11-1で，ＣもＫも高い誤用率を示していることから，どちらの母語話者にとっても，9-1より「は」と「が」のどちらの助詞を使うか判断しにくいことがわかる。(8)・(11)と，(9)の違いは，「～って」，「～らしい」という「伝聞」を表すモダリティ成分が文中にある点である。このことから，「～って」「～らしい」が誤用を招く要因となっている可能性が考えられる。しかしこれらに関する先行研究の蓄積が少ないことから，ここでは誤用の要因がモダリティ成分の存在であるか，または，ＣとＫは，「思いがけない出来事・驚いた出来事」を構成する文脈が日本語話者のように読み取れないからか，的確な判断はできない。

(8) 「中川さんの夫婦（ 8 ）離婚したんだって。」
「えっ，ほんとう。10年以上もいっしょに暮らしてきたのに，どうしてなんでしょうね。」

(9) 「もしもし，渡辺さんですか。山田です。たいへんなんです。高橋先生（ 9-1 ）亡くなったんです。」
「えっ，高橋先生（ 9-2 ）。いつですか。」
「きのうの晩だそうです。突然のことで，私もびっくりしているんですが。」

(11) 「大ニュースだ。高橋さん（ 11-1 ）上田君と結婚するらしいよ。」
「えっ，まさか。あの美人の高橋さん（ 11-2 ）上田君なんかと？」

4.3.2　名詞を修飾する節の主格と主文の主語とを示す場合

(30)と(31)の問題文中の助詞「は」について野田（1985）は，名詞を修飾する節の主語と主文の主語が同じときは，その主語に「は」が使われると説明している。しかし30についてＣの誤用率が67.7%，Ｋの誤用率が55.0%と高い数値を示し，ＣとＫにとって，「は」を選択しにくいことがわかる。

一方，同じ条件で「は」を使用する31の誤用率は，Ｃが41.2%，Ｋが15%と30より低くなっている。このような差が現れた要因として，(30)の文中に名詞「本」に続く助詞が「は」になっている（文中二重下線部）ことが考えられる。(30)の文中の「(本) は」という形は，主題の機能を担っているという誤った判断を導き，主題である「本」を修飾する節の中に「は」は現れないと考えさせたのではないだろうか。また(30)の文中の「(本) は」は，「(本) を」に置き換えて考えることができることも，学習者の助詞の正用の判断を困難にしている可能性があると予想される。

さらに(30)と(31)の誤用率が比較的高いのは，一文の文章のみの問題文のため，他の会話形式の問題に比べ前後の文脈や場面・状況が想定しにいからではないだろうか。場面や状況設定の容易さも，助詞の選択の困難度につながると推測される。

(30)	私（ 30 ）おもしろいと思った本はかならず友達に貸すことにしている。
(31)	私（ 31 ）買ったばかりのかさを電車の中に忘れてきてしまった。

4.3.3　疑問補文「～か」の場合

34，37-2，46は，「が」を用いなければならないが，34はＣが70.6%，Ｋが40.0%，37-2はＣが52.9%，Ｋが25.0%，46はＣが55.9%，Ｋが15.0%と誤用率が高く「は」を選択した人が多くなっている。間宮・小島（1992）は日本語初級用教科書の内容を「は」と「が」の使い分けという観点から分析し，10ヶ条の法則にまとめている。その10ヶ条の１つに，「疑問代名詞の前は必ず「は」を使う」という法則がある。(34)，(37)，(46)の問題文にはいずれも疑問文が埋め込まれている。したがって学習者は，初級段階で覚えたルールをそのまま適用し，誤用にいたったと推測される。

この結果から(34)，(37)，(46)のような疑問文が埋め込まれると，疑問代名詞の前の「は」は「が」に置き換えなければならないという文法的操作の必要性を学習者に明示すべきであることがわかる。

(34)「胃が痛いと言っていましたが，病院へ行ってきましたか。」
「ええ。でも，検査の結果（34）どうだったのかはまだ聞いていません。」
(37)「長谷川さん（37-1）映画監督と結婚するという噂は本当なの。」
「ええ。本当よ。二人（37-2）どこで知り合ったか知らないでしょう。教えてあげましょうか。」
(46)「この鳥，買ったんですか。」
「いや，うちに迷い込んできたんです。この鳥（46）どこから来たのかは調べてもわからないので，うちで飼っているんです。」

4.3.4 疑問補文「～かどうか」の場合

35の誤用率はCが55.9%，Kが45.0%で，36の誤用率はCが64.7%，Kが15.0%という結果になった。疑問詞を含まない疑問補文として，「～か」と「～かどうか」の形がある。「～か」の補文は，取り出しても自然な文として成り立つのに対して，「～かどうか」の補文は，取り出すと自然な文として成り立たないという特徴がある。その違いについてはここでは詳細に触れないが，注目したい点は，CとKが「～かどうか」を含む文でおかした誤用は「～か」を含む疑問補文でおかした誤用と一致していることである。このことから，「～かどうか」が「～か」から成る疑問文と同一視されたため，主語の後ろに「は」が付くと認識され，誤用を引き起こした可能性がある。したがって，「～かどうか」を含む文は特に取り上げて指導することが望ましいと言えるのではないだろうか。

(35)「ボーナスは30日に出るそうだよ。」
「アルバイトの人もボーナスがもらえるんですか。」
「アルバイトの人（35）ボーナスをもらえるかどうかは知らないなあ。」
(36)「8月のはじめに家族で伊豆に海水浴に行きたいんですが，民宿はどこも満員でしょうねえ。」
「それじゃ，私の知り合いの西伊豆の民宿（36）そのころ空いているかどうか聞いてあげましょうか。」

森田（1997）は，疑問補文の主語の現れ方を分析し，表４のような結果を得ている。この結果から「～か」と「～かどうか」の補文の主語のほとんどが「が」で表示されていることが明らかになっている。したがって学習者にこのような文法的な現象があることを理解させたほうがよいことが裏付けられる。

表４　疑問補文の主語の現れ方（森田 1997：26）

	カドウカ節	単一カ節
主語表示のあった例数	111	50
「が」で表示したもの	109（98%）	46（92%）
「は」で表示したもの	2（2%）	3（6%）
「も」で表示したもの	0（0%）	1（2%）

4.3.5　旧情報・新情報を示す場合

(2)と(18)の２問は，旧情報（既知）の場合は「は」を，新情報（未知）の場合は「が」を，というように使い分ける問題であるが，2-1，2-3，18-2のように述部が先行する文脈に現れ「旧情報」とされるとき，主語に「が」を用いるという判断は，Ｃには容易ではないようである。18-2は91.2%と誤用の順位で最も高く，また2-1と2-3でも70.6%と４位で，誤用率が高い。2-1と18-2に先行する文脈の主語は旧情報であるが，同じ名詞（二重下線部）が2-1と18-2を含む文の述部の部分であるため，学習者，特にＣにとっては正しく判断するのが困難なようである。旧情報と新情報という観点から助詞を判断するという法則が意識されておらず，指示詞の「あれ」と「この」に続く助詞として「は」が選択された可能性もあると推測される。

一方，Ｋの誤用率は2-1で5.0%，2-3と18-2でそれぞれ10.0%とかなり低い。Ｋの母語に同じ用法があることから，正の転移で誤用率もかなり低くなっている。

(2)　「この写真に子供のときの山本さんが写っていますよ。」
「ええと，この子（2-1）山本さんですか。」
「いいえ，その子（2-2）山本さんのお兄さんです。その隣の子（2-3）山本さんです。」
(18)「この道をもう少し行くと，国立劇場（18-1）ありますよ。」
〔しばらくして〕
「あれ（18-2）国立劇場ですか。
「いいえ，あれ（18-3）裁判所です。国立劇場（18-4）あの後の建物です。」

4.3.6 対比を表す文が埋め込まれた文

(39)では，話者の発話判断の根拠となっている「お父さんが高校の音楽の先生であるコト」と「お母さんがピアノの先生であるコト」が並列関係をなし，埋め込まれることによって「が」が使われる。しかし，Cの場合，39-1と39-2ともに誤って「は」を使う率が73.5％（誤用順位３位），61.8％と高くなっている。この結果から，Cは対比を表す文が埋め込まれているととらえているのではないかと考えられる。(39)の波線（〰〰）の部分は，「長田さんは，お父さんは高校の音楽の先生で，お母さんはピアノの先生です。」と読みかえることができるため，(39)ではCは対比を表しているという類推が働き，「お父さん」「お母さん」の後ろに「は」をつけてしまうのではないだろうか。

一方，Kは39-1の誤用率は15％と低率であるが，39-2は誤用率が65％と誤用順位では１位になっている。この結果からKは39-2の助詞のある部分を「～のは，…だからです」という独立した構文でとらえていると推察され，それが誤用の要因になっていると考えられる。そのため「～のは，…だからです」の構文について特に調査を行った上で，さらに考察する必要がある。

Cでは39-1の誤用率が，Kでは39-2の誤用率の方がかなり高いという違いから，CとKの従属節に対する認識も，根本的に異なると言えるのではないだろうか[5]。Kにとって，このような構文は対比と認識されにくく，Cにはされやすいという傾向があることがわかる。

(39) 長田さんが歌がうまいのは，お父さん（39-1）高校の音楽の先生で、お母さん（39-2）ピアノの先生だからです。

4.3.7 「はず（がない）」を含む文

15の誤用率は，Cが47.1％，Kが35.0％，また40の誤用率はCが70.6％，Kが25.0％と高い。(15)は，会話文になっており「大型トラックを運転できる人を探している」という前提で場面が明確なため，その応答の文中で日本語話者は15に「が」を使うと判断する。もしこのような場面設定がなければ，15に「は」，「が」のどちらでも使えるのである。しかし，CとKはある文脈が設定されているにも関わらず，日本語母語話者と同じようにそれと関連づけて考えることができないため，誤用を起こしたと推測される。また，(15)は「誰が大型トラックを運転できるか知りませんか。」と疑問

詞疑問文と解釈することができ，「誰が…」という質問に対する応答文として，「佐藤君が…」と答えている可能性もあるのではないだろうか。(15)のような文の場合，疑問詞を含む文に置き換えて考え，それに対する答えの文の助詞を考えるよう，指導することも一つの方法ではないだろうか。

40は「はずがない」の階層内にあるため「が」が使われる。庵他（2001）は，「はずがない」に先行する事柄が「はず」にかかる名詞修飾節に相当し，内部に主題を含み込まないため，「～が」のほうが自然になると述べている。例えば，「〔彼が私の居場所を知っている〕はずがない」となる。このことは「はずがない」の「はず」が「はずだ」の「はず」と異なり，名詞としての性質を強く残していることを示しており，あえて「彼は～はずがない」とすると「彼」を他の誰かと対比しているようなニュアンスになると指摘している。例えば，「彼は私の居場所を知っているはずがないが，彼の妻は知っているかもしれない」というような意味あいになる。このように，「はずがない」の構文で「は」と「が」の助詞の違いによって生まれるニュアンスの違いは学習者に意識されにくいことがわかる。学習者にとって初級の段階で学習される「はず（がない）」の用法は，助詞の使い方に難しい点があると考えられる。

(15)「大型トラックを運転できる人を知りませんか。」
「そうですね。たしか佐藤君（15）大型の免許をもっているはずですよ。」
(40)「小泉さんの書いた小説が芥川賞の候補になったって本当ですか。」
「まさか。あの人（40）小説を書くはずがないよ。」

4.3.8　先行する文脈に現れた名詞やテ従属節の主語の場合

19-1と19-2の誤用率は，Kではどちらも5.0％と低いのに対し，Cは19-1が64.7％，19-2が61.8％と高くなっている。19-1の助詞に続く名詞「景色」は，先行する文脈にすでに現れており旧情報であるため，「は」が使われる。しかし，接続助詞「が」（二重下線部）の前項と後項とは一般的に対比を表すため，後項は前項と共に「は」を使うという誤った類推が働き，誤用が起こるのではないだろうか。

また，19-2の助詞は，文末の節「つまらないですよ」に対する従属節の主語に付くため，「が」が使われるが，19-1と19-2の両方とも間違った人を調べてみると，44.1％に達している。この結果から，(19)のような複文では，正しい助詞の使い方を判断するのは，Cにとってかなり困難だと考えられる。それに比して，このような複文は

Kにとってあまり問題にならないようであるが，これは韓国語からの正の転移であると考えられる。

(19)「このあたりは静かだし，景色もいいですね。」
「たしかに景色（19-1）いいですが，遊ぶところ（19-2）ぜんぜんなくて，つまらないですよ。」

4.3.9 既出の名詞につく「は」

1-1の誤用率は，Cが23.5%，Kが15.0%，また1-2の誤用率はCが61.8%，Kが35.0%という結果になった。CとKではCの方が誤用率が高く，1-1より1-2の方が誤用率が高いことがわかった。

1-1は，単純に先行する文に既に現れた名詞に続く助詞のため，「は」が使われる。この「は」は，4.3.8で述べたような同じ名詞の重複使用ではなく，指示代名詞（二重下線部）によって先行文に現れた同じ人物を指す。このように指示代名詞が先行する文脈の旧情報を示しているという点が理解しにくいのではないかと考えられる。また1-2を含む文の構造はテ形で一旦中止し，しかも「～のです」という文末表現が使われるなど，構文がより複雑になっているため，学習者に複雑な処理が要求され1-2の誤用率は1-1より高いと推測される。

(1) きのう，へんな人と話している夢を見ました。その人（1-1）私の知らない外国語で話し続けるのです。私はこわくなって走って家へ帰ったんですが，その人（1-2）私を追いかけてきて，またわからない外国語で話し続けるのです。どうしてこんなへんな夢を見たのでしょうね。

4.3.10 対比を表す「は」

25-3と25-4は，対比を表す「は」を補う問題である。Cは25-3と25-4とも47.1%，58.8%と誤用率が高く，Kは25-4のみ誤用率が55.0%と高い。これは，学習者が教科書で提示される「～がわかる」，「～ができる」というユニットで覚えてしまい，接続助詞「が」には前項と後項との「対比」を表す機能があることを認識している学習者が少ないためではないかと推測される。このように，学習者がユニットで覚えてしまうことを「ユニット形成のストラテジー」という。これは，ある言語項目が前または後

ろの語と１つのユニットとして固まりのように処理されることをさす（迫田 2002)。例えば，「～ある」は「が＋ある」というユニットで学習者の頭の中で処理されている可能性が高いということである[6]。

Ｋが25-4に関して誤用率が高いのも，「は」とのペアで「対比」を表すという文法的な知識が十分でないためではないだろうか。

(25)「青木さん（ 25-1 ）中国語（ 25-2 ）読めますか。」
「意味（ 25-3 ）わかりますが，発音（ 25-4 ）できません。」

4.4　学習者の背景情報と助詞に対する意識調査

「日本語の助詞は難しいと思うか」という質問に対して，Ｃは97.0％，Ｋは80.0％が「はい」と答え，両グループとも難しいと感じている学習者が多いことがわかった（表５)。しかし，助詞の使用に際し「意識して使っているか」と質問したところ，Ｋでは65.0％の人が「はい」と答えたのに対し，Ｃでは意識していると答えた人は，約35％にとどまった（表５)。Ｋが日本語の助詞を意識して使っていると答えた人が多かったのは，韓国語には助詞の体系があるため，日本語の助詞と対応させながら使用しているためではないかと考えられる。実際，西隈（1998）は，学習歴一年程度の初級レベルのＫは，日本語の「は」と「が」を使う際，母語の韓国語に頼る傾向が見られるという調査結果を報告している。それとは逆に，中国語には日本語のような助詞がないことが，Ｃが日本語を使う際，特に助詞を意識しない要因の一つではないかと考えられる。

表５　助詞の使用の意識について

	助詞は難しいと思うか（％）	助詞を意識して使っているか（％）
Ｃ	97.0（33／34人）	35.3（12／34人）
Ｋ	80.0（16／20人）	65.0（13／20人）

4.5　難しいと感じる助詞の順番について

難しいと感じる助詞の順位付けの結果は，表６に示したとおりである。Ｃにとって「が」がもっとも難しく感じられるという結果になった。これは「が」は動作・状態・性質の主体及び能力・希望・好悪などの対象を表し，述語によって機能が多岐にわた

るため，難しいと感じる学習者が多いと推測される。２番目になった「は」は，主題，取り立て，対比などを表す。「が」の意味・用法より機能は少ないが，Ｃにとってはより抽象的な概念を表すため，難しいと感じる学習者が多いと考えられる。また，格助詞「が」にさらに取り立て助詞「は」を重ねると，形態的には「は」しか現れていないため，「は」と「が」の使い分けはＣを混乱させ，難しいと感じられる助詞の上位を占めるという結果になったのではないだろうか。「に」は，時間，場所・範囲，目標・対象，帰着点，動作の方向，動作・作用の原因，変化する結果などさまざまな意味を表すが，Ｃにとって，意味的には「は」より把握しやすいようだ。

Ｋの場合，上位になった助詞は「に」であった。日本語の「に」に対応する韓国語の助詞は述語によりいくつかの異なる助詞に対応する[7]。そのため，使い分けが難しいと感じられると推測される。２番目に多かった「で」の場合も「に」と同様に，述語によりいくつかの異なる助詞に対応する。しかし日本語に対応する韓国語の助詞の数は，「で」のほうが「に」より少ないため，使い分けは簡単に感じられるのではないかと考えられる。

一方，Ｃが上位にあげた「は」と「が」については，Ｋはさほど難しいと感じていないという結果になった。日本語の「は」に対応する韓国語の助詞は，接続する前の名詞が母音で終わる場合は「는(nun)」，子音で終わる場合は「은(un)」である。また日本語の「が」に対応する助詞は，接続する前の名詞が母音で終わる場合は「가(ka)」，子音で終わる場合は「이(i)」である。接続する前の名詞の音声要素を除けば，基本的には日本語の助詞と一対一の対応の関係をなす。このような単純な構図なため，「は」と「が」はＫにとって使い分けは難しい助詞ではないことがうかがえる。

表６　難しいと感じる助詞の順位

	１　位	２　位	３　位	４　位
Ｃ	が (23人：67.7%)	は (21人：61.8%)	に (17人：50.0%)	で (６人：17.7%)
Ｋ	に (13人：65.0%)	で (８人：40.0%)	は (５人：25.0%)	が (４人：20.0%)

５．まとめ

調査の結果，「は」と「が」の誤用率の平均はＣはＫの三倍以上に及び，ＣとＫの

誤用率の分布には大きな差があることが明らかになった。しかし，助詞に関する意識調査で，Kでも8割の被調査者が難しいと答え，Cと同様に苦手意識があることもわかった。

先行研究を概観した坂本（1997）は，「は」と「が」の習得難易度について中立叙述の「が」は中間くらいに位置付けされ難しい部類には入っていないが，本調査では誤用率がもっとも高いクラスになった。これは文脈情報が少なければ，思いがけない出来事や驚いた出来事について述べる文で使用される「が」を「は」とする誤用がCもKも高くなる可能性があることを示している。また文中の主語が名詞節の連体修飾部の動作主体を兼ねる場合の「は」を「が」とする誤用率も，際立って高いことが示された。特に名詞節に「は」が付く場合である。

さらに文脈に現れた新情報・旧情報の概念は，CとKのどちらにとっても理解しにくく，特に先行する文脈に既に現われた主語が旧情報として「が」で表される場合に，助詞の使い分けが難しいことが明らかになった。「～か」や「～かどうか」などの疑問補文の場合も誤用率が高い。

対比を表す「は」の誤用率はCもKも高いが，誤用の傾向が異なる。特にKの場合，「～ができる」を含む複文の場合に誤用が目立つ。その要因の1つとして，言語習得過程での「ユニット形成のストラテジー」の使用が考えられる。学習者へのインプットの量や教科書の例文が，ある特定のユニット形成を促進する要因や学習者独自の文法を作り出す要因になっている場合も少なくない（野田 2001）ことが今回の調査からも裏づけられた。

今回の調査から，「は」と「が」の複文での使用，および文脈，場面に決定される使用は，CとKにとって，理解しにくいことが明らかになった。このような助詞の正用をはばむ要因となっている問題点について，文法研究の観点から法則をより合理的に整理することが必要である。それを学習者に示すことができれば，「は」と「が」を正確に使用できるようになることが期待される。

このように本研究で「は」と「が」の誤用の要因を考察していくことによって，学習者に明示すべき点がいくつか明らかになった。これは日本語の指導や学習にいかしていくことができると考えられる。

Kが「は」と「が」の使い分けに問題が少ないのは，母語からの正の転移であるかどうか，また誤用の要因が「ユニット形成のストラテジー」を使用したためなのか，母語の影響による負の転移なのかなど，さらに詳しく調べる必要がある。また誤用につ

いては外的要因や内的要因など様々な要因が考えられることから，言語間の言語学的な対照研究のみならず，第二言語習得研究という立場などからの研究も必要であり，今後の課題であると考えている。

参考文献

市川保子（1989）「取り立て助詞「は」の誤用」『日本語教育』67号，日本語教育学会，159-172

庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』松岡弘監修，スリーエーネットワーク

庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』白川博之監修，スリーエーネットワーク

大槻邦敏（1987）「「は」と「が」のつかいわけ」『教育国語』91号，むぎ書房，22-37

金仁炫（1996）「日・韓両語の助詞の対照研究－「は」「が」と「un／nun」「i／ka」を中心に－」『文学と教育』31，文学と教育の会，12-23

坂本正（1997）「第二言語習得研究と日本語教育－助詞「は」と「が」について－」真紀・ハバード，坂本正，ジェームス・デーヴィス編『日本語教育：異文化の懸け橋：三浦昭先生古稀記念論文集』アルク，175-189

迫田久美子（2002）「第二言語習得に関わるさまざまな要因」『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク，58-122

田窪行則（1987）「誤用分析」『日本語学』４，５，６，７月号（『続・日本語学誤用分析』（明治書院，1997）100-141に再録）

田村泰男（1993）「日本語上級学習者の「が」「は」の使い分けに関する理解度について　－単文中で主語をマークする場合－」『広島大学留学生センター紀要』第４号，41-48

野田尚史（1985）『セルフマスターシリーズ１　はとが』くろしお出版

野田尚史（1996）『新日本語文法選書１　「は」と「が」』くろしお出版

野田尚史（2001）「学習者独自の文法の背景」野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子『日本語学習者の文法習得』大修館書店，45-62

西隈俊哉（1998）「日本語の「は」と「が」の使い分けの困難さについての小考察－韓国人学習者をとおして－」『平成十年日本語教育学会予稿集』，87-92

羽鳥玲子（1996）『당신의 일본어 때빼고 광내기』시사일본어사

花田敦子（1993）「外国人の「は」と「が」の習得について」『日本語教育論文集』福岡YWCA，27-43

穂積晃子（1992）『中國人學日語常見病句分析100例』顧海根・李強訳，笛藤出版圖書有限公司

益岡隆志（2000）『日本語文法の諸相』くろしお出版

間宮美和・小島幸子（1992）「日本語助詞の使用法説明について－日本語教育における「は」と「が」の使い分け－」『東京産業短期大学紀要』第６号，125-140

森田富美子（1997）「「名詞相当」の「～かどうか」・「～か」に関する問題点－書き言葉の場合－」『東海大学紀要　留学生教育センター』17，23-36

八木公子（1998）「中間言語における主題の普遍的卓越－「は」と「が」の習得研究からの考察」『第二言語としての日本語の習得研究』第２号，第二言語習得研究会，57-66

安田吉実・孫洛範（1997）『新訂　日韓辞典［新装版］』民衆書林

陳伯陶（1999）『新時代日漢辭典』大新書局

註

(1) 問題の正答は，野田（1985）に従う。

(2)「(28)大きなアユ（　　）このあたりでよく釣れます。」の助詞として被調査者の９人が「が」と答えたが，問題の解答は「は」と記載されていた。

(3) 本稿での問題文と出題部分の表示法を示す。

例：(37)「長谷川さん（ 37-1 ）映画監督と結婚するという噂は本当なの。」

「ええ。本当よ。二人（ 37-2 ）どこで知り合ったか知らないでしょう。教えてあげましょうか。」

本文中の37は(37)番の問題文全体を指し，37-1は問題37の１つ目の項目を，37-2は２つ目の項目を指す。

(4) Ｃの場合：誤用人数／Ｎ，Ｎ＝34。Ｋの場合：誤用人数／Ｎ，Ｎ＝20。

(5) この認識の違いについてはデータが十分でないため，本稿では述べないことにする。

(6) 野田（2001）は，日本語母語話者同士の会話と日本語の教科書に現れる助詞の「に」と「で」について調べ，母語話者同士の会話や教科書では，位置名詞と「に」が結びつくことが多く，特定のユニットが形成される要因になっていると指摘している。

(7) この点については安田・孫（1997）に詳しい。田窪（1987）も韓国語では「乗る，従う，

似る，会う，向かう」などは対格を取ると指摘している。

謝辞：本研究の調査にあたり，ご協力くださった先生方ならびに留学生のみなさんに，ここに記して感謝申し上げます。

（謝－琉球大学大学院人文社会科学研究科，金城－琉球大学留学生センター）

Error Analysis of Japanese Particle *Wa* and *Ga*
−A study on Chinese native speakers and Korean native speakers−

XIE, Futai
KINJO, Naomi

Keywords : particles, *wa* and *ga*, error analysis, Korean native speakers, Chinese native speakers

Abstract

This study investigates errors which Japanese language learners make when they use a particle *wa* or *ga* in a sentence. Especially, the focus was put on the Chinese native speakers and Korean native speakers. The students taking intermediate or advanced level Japanese courses were given a test about particles by paper, which has 75 blanks to put into *wa* or *ga*. We could collect data of 34 Chinese native speakers and 20 Korean native speakers. The result of the test clarified that Korean native speakers made less errors than Chinese native speakers. The highest rate of errors of Chinese native speakers is *ga* which indicates old information. On the other hand, the highest rate of errors for Korean native speakers is *ga* which occurs in an embedded sentence including contrastive meaning.

(University of the Ryukyus)